

# 寂寥

環眞沙緒子

寂寥は――

日暮になると心にヒタヒタと

忍びよる

そして胸の古傷を

鋭いメスでえぐる

傷みに耐へかねた時

私は心のカナリヤに

想ひの文を結んではなす

心のカナリヤは

遙かに杳い緑衣の

星を目ざして

暮靄の彼方に消えてゆく。

「山桜」昭和九年一月号

（詩）